

国の建築基準法や、鉄鋼業界のPR及び廉価な供給など諸外国とは異なる点もあり、集成材建築は高くつくと言う人もいるが、それは設計の仕方、発注の仕方にかかっていると思われる。最近建てられた広島県木材利用センター（2階建て、延床面積約400m²）には構造用集成材が30万円/m³程度で供給されている。この建物は始め鉄筋コンクリート造を想定して設計されたが、敷地が埋立地のため、くいが必要とされ、地質調査の結果、基礎部分に相当のコストがかかることがわかり、急ぎよ構造用集成材を用いた木造建築に設計を変更し、建てたものである。トータルコストを計算すると最初の鉄筋コンクリート造の場合よりも約1割安く出来たと言うことである。さらに広島県では昭和57年度にこれに付属した建物を建てる予定であり、ここにも集成材を使うことに決定したと聞いている。これは鉄筋コンクリート造の場合と比較して重量が約1/2.5となっていることから、地耐力の期待できない敷地にも十分適用できると言うメリットを生かした好例だと思う。

なお、集成材は一般に大断面になることから火災にあった場合、表面の炭化によって内部が保護され、燃焼がそれ以上容易には進行しないため、鉄骨よりも安全性が高いと言われている。米国ではかなり早くからこのことが評価され、耐火構造としての扱いがなされている。我が国においても、実際の火災例や実験を通じてこの性能がようやく確認され、現在、建設省では集成材による木構造物に対しては、建築基準法第21条第1項（木造は高さ13m、軒高9m以下）の制限を緩和するため法令の整備を行っているようである。これを契機として集成材建築が更に興隆することを切に望みたい。外国のようにスパン100mもあるものを作らなくとも、せめて10、20、30m程度の素晴らしい建物が続々と建つようメーカー、建築設計者・施工者が一体となって努力すべきである。集成材と言うユニークな材料が、日本の建築の中にますます生かされることを心から希望する次第である。